

豚の心臓の先天性横紋筋腫の1例

○石曾根彩、川口絵梨、岩田智明

神奈川県食肉衛生検査所

I はじめに

動物では、心臓に発生する腫瘍のほとんどが転移性腫瘍で、原発性腫瘍は稀である。豚などに見られる心臓横紋筋腫は、奇形の一一種の過誤腫であり、眞の腫瘍ではないとされている。今回当所管と畜場に搬入された豚で、心臓に腫瘍及び結節を多数認め、心臓横紋筋腫を疑った症例について、病理学的検索の概要を報告する。

II 材料及び方法

症例は豚、交雑種、性別不明、6カ月齢で、健康畜として搬入された。病変部を10%中性緩衝ホルマリン溶液で固定し、パラフィン切片を作製後、HE染色、PAS反応、PTAH染色及び各種一次抗体を用いた免疫染色を実施した。

III 成績

肉眼的に心臓心内膜面では、左心室乳頭筋にピンポン玉大の赤褐色腫瘍を1つ認め、左右心室及び心室中隔に小豆大の赤褐色結節を多数認めた。剖面では、最大腫瘍は軽度に膨隆していた。その他の結節に膨隆は認めず、心室壁内に米粒大から小指頭大の結節を多数認めた。病理組織学的に、腫瘍部では、心内膜直下の心筋層に、腫瘍を構成する細胞が多数集簇し、網目状の構造を呈していた。同細胞は、大型、不整形で、細胞質は好酸性、大小不同の空胞を多数有していた。spider cellと呼ばれる細胞を認めた。核は大小不同、類円形または不整形で、一部で2核や多核の細胞を認めた。核小体は大型、明瞭であった。有糸分裂像は認めなかった。間質では炎症細胞の浸潤を散見した。特殊染色では、細胞質にPTAH染色で青染する横紋及び顆粒状のPAS反応陽性物質を認めた。同顆粒はアミラーゼ消化試験にてPAS反応陰性となり、グリコーゲンと判明した。他の結節も最大腫瘍と同様の組織像を認めた。免疫染色では、腫瘍構成細胞は、抗デスマント抗体、抗ミオグロビン抗体に陽性、抗ビメンチン抗体に弱陽性、抗神経特異エノラーゼ抗体では、核周囲の顆粒が陽性、抗ケラチン/サイトケラチン抗体(AE1/AE3)、抗平滑筋アクチン抗体に陰性を示した。(抗体はすべて株ニチレイバイオサイエンス、東京)

IV 考察

本症例は、肉眼的に病変の形成部位や、病理組織学的に、腫瘍構成細胞の細胞質内におけるグリコーゲン貯留及び多数の空胞形成、spider cellを認めたこと、免疫組織化学的に心筋細胞やブルキンエ線維類似の結果を示したこと、これらの所見が既報と一致することから、豚の心臓の先天性横紋筋腫と診断した。

本症例は、欧米では特定の品種(レッドワトル豚)で多く報告されているが、日本では報告例が少ない。地域による検出状況の差異は飼育されている豚の品種の違いも一因と考えられた。